■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

27　上野千鶴子「生き延びるための思想」

●参考　上野千鶴子『サヨナラ、学校化社会』【370/U1/1】（北野高校図書館）

■目標　視界を広げ、深く問う

■追跡

①　女自身が弱者であるかどうかは、わからない。オリンピックの格闘技で日本女性が金メダルをとるような今日、彼女たちを敵にまわしたいと思う者は誰も（男も）いないだろう。だが、女はつねに弱者の傍らにいた。女は子ども、高齢者、病人、障害者……の傍らにいた。女自身が妊婦や産婦ならば、女は最弱者のひとりとなった。なぜなら……女は「ケアする者」だったからだ。女が「ケアする者」でなければ、「女の問題」と呼ばれてきたもののうち、すべてとはいわないが、かなりの部分が解消するであろう。なぜ女だけがケアするのか、ケアとは何か、なぜ家庭のなかで行われるケアは無償なのか？　なぜケアの値段はこれほどまでに低いのか？

語りのスピードに乗って、問いを見失わないように、立ち止まろう。

女自身が弱者なのではない。

女は、子ども、高齢者、病人、障害といった弱者をケアする者だった。

女の問題は、女がケアする役目を背負ってきたことに存在する。

女だけがケアを担わされてきたこと（男は何もしない）。

女（母・妻・嫁）が子どもや高齢者をケアすることは、タダ働きであったこと。

どうしてこんなことになったのか。

そして、そもそも、ケアはとは何か？

②　ケアする者とケアされる者とのあいだには、圧倒的な非対称性がある。それをおおいかくす言説が「母性愛」や「母子一体感」だ。育児の場合には「愛」や「本能」で隠されるこの非対称性は、介護の場合には隠しようもなくあらわになる。できれば逃げ出したいこのいまいましい責務――「ママ、いつになったら死んでくれるの」と小説家に言わせたケアという関係は、実の娘にさえ、逃げ出したい重荷としか受けとられない。にもかかわらず、多くの母は子どもを――時には悪魔のように感じながらも――ケアしつづけ、多くの妻や嫁や娘は――まれには虐待しながらも――要介護者を見捨てずにきた。

女が子どもや高齢者をケアしてきた、その内実は？

「ケアする者とケアされる者とのあいだには、圧倒的な非対称性がある」とは？

▼**「対称」＝交換できる**、と覚えておこう。左右対称とは、折り重ねると、ぴったり重なる状態だ。入れ替え可能。対称性とは、入れ替え可能性。非対称とは、入れ替え、交換できないよ、ということ。「対照」と混同しなや。白と黒の対照（コントラスト）。これは入れ替えでけへんやろ？

世話しているママは、一方的に赤ちゃんを世話するだけ。ときどき赤ちゃんがママを世話してくれるってことはありえない。入れ替わり不能。

でも、赤ちゃんを育てること自体の喜びがその代償として返ってくるじゃん。たしかに。

しかし、赤ちゃんの方はまだいい。でも、衰えゆく一方の相手を世話する介護のほうは？

親だから、放置はできない。そういう責任感だけでやっていけるのか。認知症になった親が、言うことを聞かず、反抗してくる。

ひとつの命をすべて自分が背負い、睡眠も、外出もままならず、世話し続けることを想像してみよ。もちろん、職業人としての自己実現の断念という代償も払って、だ。

多くの女は、それでも、耐えてきた、と筆者は言う。しかし――

③　ほんとうにそうか？

④　二〇一〇年、大阪市で起きた「幼児ふたり置き去り餓死事件」の報道は、大きな衝撃を与えた。だが、メディアは「母性愛の崩壊」とは言わなかった。夫に捨てられ、頼った実家に拒絶され、シングルマザーになって風俗業で暮らしを立てていた若い母親が、つらい現実から逃れたいと思ったとしていったい誰が責めることができるだろうか。自分がネグレクトするだけで相手の命を奪うとわかっていたとしても、裁判で「殺意はなかった」でも「子どもたちがどうなるか、わかっていました」と言う彼女を、それ以前に彼女と子どもたちをネグレクトしてきたすべての大人たちの誰が責めることができるだろうか。

筆者の趣意をはっきりつかむこと。

彼女を責めることはできない。彼女と子どもたちをネグレクトしてきたすべての大人たちは。彼女にケアのすべてを押しつけた大人たち。ケアだけではない。お金を稼ぐことも、だ。

では、捨てた夫が悪いのか、拒絶した実家が悪いのか。誰が悪いのだ？

⑤　この報道が与えた衝撃は、ひるがえって、同じような状況にいながらその場から逃げなかった者たち、子どもや年寄りや障害児を見捨てずにそこにとどまった者たちがどれほどいたか、そのこと自体が奇跡のような事態だという感慨だった。これまで人類史のなかで、どれほどの母が妻が嫁が娘が、依存せずには生きていけない者の傍らで、そこから立ち去ることを選ばずにきただろうか？　そしてまたあまたの幼児虐待や高齢者虐待の報道に接して、これまでいったいどれだけの母や妻や嫁や娘が、圧倒的に依存的な存在に対して、ネグレクトのみならず、虐待や暴力を行使せずにきたのだろうか、と**読解問題1問い**を反転させることができる。

読解問題１　「問いを反転させる」とは具体的にどのようなことか。

答の形を考えると、「Ａという問いを、Ｂという問いに反転させるということ。」とか「Ａという問いを反転させて、そこからＢという問いを導き出すということ。」といった形が考えられる。

Ａに当たる問いを考える。報道がもたらす問いは、「彼女はどうして子どもを見捨てたのか」である。これは書かれていない。しかし、Ｂの問いから逆に導かれる。もちろん、直観的にもわかるけど。

Ｂに当たる問いは、以下。

「同じような状況にいながらその場から逃げなかった者たち、子どもや年寄りや障害児を見捨てずにそこにとどまった者たちがどれほどいたか」

「人類史のなかで、どれほどの母が妻が嫁が娘が、依存せずには生きていけない者の傍らで、そこから立ち去ることを選ばずにきただろうか」

「これまでいったいどれだけの母や妻や嫁や娘が、圧倒的に依存的な存在に対して、ネグレクトのみならず、虐待や暴力を行使せずにきたのだろうか」

最後の形が最も整っている。これをさらに整理して、答案に使おう。

解答例「『なぜその母親は子どもを放置し餓死させたのか』という問いを反転させて、『なぜ多くの女たちが弱者を放置せず、暴力もふるわず、ケアしてきたのか』という問いを導くこと。」

これは一つの謎である。この謎が次の思考へと展開していく。

●この「問いの反転」、問いから別の問いを導くこと、問い方を変えてみること、というのは、この先、諸君が習得しなければならない、きわめて重要な技術である。

問いはまず、常識的な次元からやってくる。「なぜこんなことに！」。しかしそれはほとんど感想に過ぎない。**☆なぜ→どのように**、という解答の技法は、テストのためだけではなく、いや、むしろ研究・探究のために有効である。

どのようにそれは起きたか。どのような場合、それは起き、どのような場合、それは起きなかったのか。――このように問いを転換していくことが、サイエンスだ。例えば、こういうのも。彼が犯人だという前提の元に考えるのではなく、もし彼が犯人ではなかったとしたら、と問いを反転させるというのも、そうだ。

⑥　自分の手に生殺与奪を左右する権力を握った依存的な存在を目の前にして、その権力を行使せずにいることはむずかしい。なぜなら圧倒的に権力関係が非対称な状況のもとで、その権力を濫用する者があとを絶たないことをわたしたちがよく知っているからだ。セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス、パワー・ハラスメント、モラル・ハラスメント、いじめ、虐待……それらはすべて、自分に反撃するおそれのない、相手がノーを言えず、逃げ出すこともできない状況で起きていることがわかっている。非対称な権力は、わけても圧倒的に非対称な権力は、それを行使する誘惑から逃れることがむずかしい。だとすれば、同じ状況のもとで、権力を行使せずにいることの方に、努力が必要なはずなのだ。

殺せる。その時、殺すか殺さないか。この問いは、例えば、ドストエフスキー『罪と罰』の中で、青年ラスコリニコフが抱いたのと同じ問いだ。殺せるなら殺す。これは戦争などの磁場に置かれると強力に発動する。

殺すといった極端なケースでなくても、権力がふるえるならふるう、というのは、人間の持つ本性の一つだと心得よ。わが身を振り返ってみよ。きょうだいに、クラスメイトに、後輩に、小さなレベルでの「ハラスメント」を一度もおこなっていない人間などいないのではないか。

問いは残る。だは、なぜ女たちは、権力を使わなかったのか？

⑦　ケアとは非暴力を学ぶ実践である――この目のさめるような命題に出会ったのは、岡野八代の近刊『フェミニズムの政治学』である。

☆「とは」＝定義文。

⑧　ケアとは、ケアする者とケアされる者とのあいだの、長期にわたる、忍耐のいる相互関係である。そのあいだには圧倒的な非対称性がある。なぜならケアのニーズを第一義的に持つ者は「ケアされる者」であって、ケアされる者はケア関係から退出できないが（退出することは死を意味する）、ケアする者はそこから退出することができるからである（これをネグレクトという）。たとえ道徳的な非難や自責の念が伴っても、ということは、裏返しにいえば、規範や規制を伴わなければ、ひとをケアに縛り付けることはむずかしいということでもある。そしてまたこの規範にはおどろくべきジェンダー非対称性があって、女には強制されるが、男には免責されてきた。

ぼんやりしたイメージの「ケア」の本質定義を試みるとこういうことになる。

ここにある論理は次のようにクリアに記述できる。

ケアされる者はケア関係から退出することができない。

ケアする者はケア関係から退出することができる。

ケアする者がケア関係から退出しないのは、規範が有効な場合による。

規範は、男がケア関係から退出することは許すが、女がケア関係から退出することは許

さない。

⑨　女が「ケアする者」であるのは、本能やＤＮＡによるのではない。女が「ケア」を強制的または自発的に引き受けてきたからだ。そしてそれ自体が「奇跡」ではないのか？そしてもし「母性」や「ケアの倫理」というものが、女性のなかにあるとしたら、それも「自然」や「本能」のせいではなく、女のこの歴史的経験がもたらしたものだ。女は長期にわたるケアの実践のなかで、「非暴力」と、さらに言うなら「責任」とを学んできたのだ。そしてもし、（一部の）男性にそれがないとしたら、それはホルモンのせいでもＤＮＡのせいでもなく、彼らにその社会的経験が欠けていることが原因だというべきだろう。

問い。なぜ女はケア関係から退出しないのか。

答え。女は、ケアを引き受ける規範の中にあったから。

問い。その規範とは？

答え。一つは、外側から強制された規範。二つめは、ケアを引き受けざるを得ない長い歴史的経験の中で獲得した、非暴力、さらに弱者をケアしなければならない責任という、ケアの倫理。

明らかに間違っていること＝女がケアするのは生物学的本能によるということ。

女はケアから逃げてもよかったのにそうしなかったのは、「奇跡」だ、と筆者は言う。これは、それがあたりまえだということではない、という意味である。

⑩　「男にもケアへの参加を」と久しく言われてきた。そしてそれは「わが子が育つ過程を味わう貴重な機会を失わないため」とか「親の老いを経験することで自分自身の老いへの想像力を持つため」と説明されてきた。わたし自身もそれと同じような発言をしてきた覚えがある。

⑪　だがもっと根源的に言えば、「圧倒的な権力関係の非対称のもとで、非暴力を学ぶため」と言いかえることはできないだろうか。もしそれが可能なら、セクシュアル・ハラスメントもドメスティック・バイオレンスも、そしていじめも虐待も、およそ自分の支配下にあっていかようにも翻弄することのできる相手を凌辱する誘惑から、彼らを守ることができるはずなのだ。

男に、弱者をケアする社会的経験が欠けているため、彼らが、非暴力や弱者をいたわる責任を学べなかったことが、さまざまなハラスメント、暴力を引き起こしているとするなら、学べばどうか――。

学ぶべきだろう。

「圧倒的な権力関係の非対称のもとで、非暴力を学ぶ」とは、こちらが圧倒的な力を持ち、相手の生死を握っているに等しい状態で、しかし、力を使わないことを学ぶ」ということである。

幼児虐待、いじめから、会社や政治、そして、国と国との戦争まで、この社会の悲劇のほとんどが、この「権力関係の非対称」に由来する「暴力」から生まれている。この精神の根のようなものが、学び直されるなら、たしかに、この世はもっと生きやすい場所になるだろう。

⑫　暴力も学習することができるなら、非暴力も学習することができる。女が女につくられるなら、男も男につくられる。女が「ケアする者」へとつくられるように、男は「ケアをネグレクトする（してよい）者」へとつくられてきた。公的暴力や私的暴力について語るとき、わたしたちは戦争やいじめはなくならない、という運命論にうちのめされそうになる。だが、**読解問題２**ケアがわたしたちに希望を与えるのは、それが脱ジェンダー化されることを通じてなのだ。それだけでなく、ケアが人間の生き死ににふかく関わるかぎり、生まれ落ちるときに「ケアされる者」でなかった者は誰ひとり（男も含めて）おらず、老いて死ぬときに「ケアされる者」の立場に立たない者も誰ひとりいないからだ。岡野が言うように、近代の自立した「主権的主体」とは、自分が「ケアされる者」であったこと、そして現在も将来もそうであることの「忘却の政治」によってのみ、成立しているのだから。

読解問題２　「ケアがわたしたちに希望を与えるのは、それが脱ジェンダー化されることを通じてなのだ」とあるが、なぜ、ケアが脱ジェンダー化されると、私たちに希望がもたらされるのか。

脱ジェンダー化とは何か、という問いに等しい。

わかりやすく翻訳しよう。女だから、男だから、ということとは関係なく、ってことだ。性別に関係なく、ケアを担うことになると、っていうことだ。

女は、ケアを担うことで、非暴力と弱者への責任を学んできた。

性別に関係なく、ケアを担うことになると、男も、非暴力と弱者への責任を学ぶことになるだろう。

すると、戦争やいじめなど、なくならないと思われていた暴力がなくなっていく可能性がある。

これらを組み立てる。

解答例１「女は、ケアを担うことで、非暴力と弱者への責任を学んできた。性別に関係なく、ケアを担うことになると、男も、非暴力と弱者への責任を学ぶことになるだろう。その結果、戦争やいじめなど、なくならないと思われていた暴力がなくなっていく可能性があるから。」

解答例２「ケアを担えば、男も非暴力と弱者への責任を学び、様々な暴力を抑止する可能性が生まれるから。」

「近代の自立した「主権的主体」とは、自分が「ケアされる者」であったこと、そして現在も将来もそうであることの「忘却の政治」によってのみ、成立している」とは、どういうことか。

自分も赤ん坊だったこと、自分もやがて老い病気になること、そして、現在も何らかのケアを受けて生きていることを忘れ、ずっと自立して生きられる存在だという幻想が、「主体」という発想だ、というのである。

「主体」には、隷属するものではない、という積極的な意味があり、否定すべき概念ではないが、いくらエエカッコしても、私たちは、結局誰かの世話になって生かされているにすぎない存在だということも真実だ。

会社でエラそうにしていても、食事も作れない、赤ん坊の世話もできない、というような男を近代社会はたくさん生み出してきた。むしゃくしゃしたら、妻や子を殴るような男も。ついでに戦争するオヤジも。はっきりいって、迷惑やねん。

昔の話じゃない。むしろ今の話。ツイッターの投稿より。

ひつじ（育児中）19w@sheeeeep38

夫に一人になりたいと言ったら、何処かに行ってくる？と言われたので、私がふざけて、一泊二日で一人旅してきていい？と聞いたら、良いよ！と快諾されたので、驚いて「え、子供はどうするの？」と聞いたら、あぁ、そうか…連れてけば？と言われた。この会話に全てが詰まっていると思うんだ私は。２０１９年８月１０日

⑬　他者への依存なしに生きていけない「ケアされる者」は、弱者である。「ケアする者」は「ケアされる者」を抱えこむことで二次的に弱者になる。ケアの現場から立ち去ろうとしなかった者たちは、みずからも弱者になる道を選択してきた。男もケアを――という提言は、男にも強者になる道ではなく、弱者としての分かち合いを選択してほしいという呼びかけにほかならない。そして超高齢社会とは、誰にも依存せずに生きていけると思えた強者の時間は、人生のうちの一部分にすぎないことを、すべての人が思い知る社会なのだから。

⑭　暴力への反撃――「暴力の連鎖」とも呼ばれる――によっては何も生まれない。何より反撃する能力を欠いた者たちはどうすればよいのか？　そのような弱者と呼ばれる者たちが、**読解問題３それでも「生き延びるための思想」こそが、求められている**のである。

読解問題３　「それでも「生き延びるための思想」こそが、求められている」とはどのようなことか。

☆傍線部延長＋指示内容。

「何より反撃する能力を欠いた者たちはどうすればよいのか？　そのような弱者と呼ばれる者たちが、それでも「生き延びるための思想」こそが、求められている」

とりあえず、くっつけて補うと、

「暴力に対して、反撃する能力を欠いた弱者が、反撃する能力を欠いたままで、生き延びるための思想が求められているということ。」

「反撃する能力を欠いたままで」というのは、「暴力への反撃を模索しないで」ということ。暴力の連鎖からは「何も生まれない」から。弱者が、いつかおれも力をつけて、反撃してやろう、と画策する思想というのもあった。革命思想もそう。右翼もそうかな。テロリズムもそう。直接的な暴力じゃなくても、経済的な力、政治的な（地位としての）権力によって反撃を企むものもあった。勝った負けたの世界やね。女が、男のようなエリート目指す、というのも、そう。

超高齢社会とは、勝った負けたの時代が終わった後も、長いあいだ、弱者としての生活を続けなければいけない時代であり、全員が弱者の自覚を抱かないといけない時代である。ジェンダー研究は、「ケアする者」となる経験の中に、弱者として生きていく知恵の秘密を見いだした。

⑬段落の認識も含めた答案を書いてみよう。

解答例「暴力に対して、何らかの暴力や権力によって反撃しようとするのではなく、すべての人間が自分は常に弱者であることを自覚し、その弱者が弱者のままで、生き延びていけるようなものの考え方が必要だということ。」

■読解問題

１　「問いを反転させる」とは具体的にどのようなことか。

２　「ケアがわたしたちに希望を与えるのは、それが脱ジェンダー化されることを通じてなのだ」とあるが、なぜ、ケアが脱ジェンダー化されると、私たちに希望がもたらされるのか。

３　「それでも「生き延びるための思想」こそが、求められている」とはどのようなことか。

■発展問題

あなたはどのような「ケア」を受けて生きているか。また、どのような「ケア」をしているか。その経験をふまえ、本文について考えを述べよ。

●重要語「ケア」＝世話・保護・介護・看護・カウンセリングなど、他者に対して身体的、心理的に支え、援助し、働きかけることをいう。治療や指導と比べると、相手の自立性をそのまま生かして支援しようとする点で違う。